
パラテキスト研究の問題点

Confluences 誌を対象とした調査の事例に基づいて

重見晋也

はじめに

ジェラルド・ジュネットは1979年から始めた transtextualité¹⁾を巡る一連の考察の中で、ジェームス・ジョイスの『ユリシーズ』に言及して次のように述べている：

J'évoquerait simplement, à titre d'exemple (et d'anticipation sur un chapitre à venir) le cas de l'*Ulysse* de Joyce. On sait que, lors de sa prépublication en livraisons, ce roman était pourvu de titres de chapitres évoquant la relation de chacun de ces chapitres à un épisode de l'*Odyssée* : « Sirènes », « Nausicaa », « Pénélope », etc. Lorsqu'il paraît en volume, Joyce lui enlève ces intertitres, d'une signification pourtant « capitalissime ». Ces sous-titres supprimés, mais non oubliés par les critiques, font-ils ou non partie du texte d'*Ulysse*? Cette question embarrassante, que je dédie aux tenants de la clôture du texte, est typiquement d'ordre paratextuel.²⁾

ジュネットがここで典型的なパラテキストの問題として明確に指摘しているように、ある作品のテキストとその作品に先行する prépublication³⁾のテキストとの間にわれわれが認めることができるのは、単に字句レベルの相違だけではない。ある作品に関わるテキストの相違は、異なる解釈の契機を読者に対して提供するのであり、その点についてもジュネットは問題の重要性を指摘している。つまり、もし prépublication の段階で明確な章題が付されていなかったとしたら（無論ジョイスの草稿やノートを対象とした調査を通じて見いだし得ただろうし、実際に見いだしたことは想像に難くないわけではあるが）、批評家たちは『ユリシーズ』が『オデュッセイア』との間に要求しているある種の並行関係をそれほど重要視しなかったかもしれないのである。

いずれにせよ、ジュネットはこの事例を、『ユリシーズ』という出版された作品を中心に据えて説明しているのであり、それは引用したテキスト中に見られる prépublication

ということばからも明白であろう。しかし、作品という主テキスト⁴⁾にいたらない *prépublication* の段階においてもまた、ジョイスの作品は読者によって解釈されていたのであり、その段階において読者は、まだ『ユリシーズ』という作品の全体を俯瞰することができない状態におかれていたのである。このように解釈の段階を設定することは、作品が出版された後に初めて作品を読む場合とは異なる状況を設定することでもある。いかえれば、単行本で作品全体を読むことと雑誌などで断片的にテキストを読み進めることとの間には、解釈に対してなにがしかの違いが生まれると想定することができるのである。

こうした想定を、「コンテキスト」という使い古されたことばを使って説明することもできるかもしれない。しかし、ジュネットが *transtextualité* という用語を持ち出した理由の半分はこの「コンテキスト」ということばに明確な内実を付与したいという思いからだったのではないのか？ 結局のところ「コンテキスト」とはあるテキストと「ともにある (*cum*) テキスト (*texere*)」であり、一つのテキストの関連性の全体を表現するにはあまりに漠然としすぎている。テキストとともにあるテキストやその他の要素がどのように解釈に影響を与えるのか、この疑問に答えるためには解釈の対象となるテキストにだけ関心を寄せるのではなく、そのテキストとともにある事象についても同様に、細心の注意を払って考察することが必要となるだろう。

われわれの記述が理解可能なものとなるためには、対象となる事象を逐次記述していくだけで満足するわけにいかないことは言を俟たない。ジュネットが *transtextualité* の分類において用いたパラテキスト *paratexte* という概念⁵⁾が記述の出発点としては有効に思える。ジュネットはパラテキスト性 *paratextualité* の用語の広がりや、テキスト内と主に関わりを持つペリテキスト *péritexte*⁶⁾とテキスト外と関わりを持つエピテキスト *épitexte*⁷⁾とに分割していた⁸⁾。これに倣ってわれわれも、*prépublication* の外と内とに問題を暫定的に区分することができるだろう。

ジュネットによるエピテキストという概念は、物質性を異にするテキスト間の関係性をさすことばであり、そこにはわれわれが考察の対象とする主テキストとの関係づけを要求するエピテキストの存在が前提⁹⁾とされている。そしてそれらのエピテキストを通してわれわれは主テキストが置かれた社会的な環境要因を導き出すことが可能になるだろう。約言すればエピテキストとはテキストの社会環境要因を析出することを可能にする際の一次資料となるはずのものなのである。

一方でペリテキストとは、主テキストと物質性を一にするテキストで、表紙や目次や裏表紙など、読書の実践を補助する役割を果たすテキストである。これなしには読書が成立しなくなる訳でないという点において、付随的、副次的な役割しか果たさない。しかし、全くなくなってしまおうと読書の実践を妨げること、あるいは書籍の歴史、印刷の歴史はすべからくこうしたペリテキスト的な技術の開発と進化として位置づけること

ができる点を考えると、テキストの物質性を考慮する上で非常に重要なテキストの環境要因と見なさねばならないだろう。

それは、印刷物に付与されたユーザ・インターフェイス¹⁰⁾ともいえるかもしれない。ユーザ・インターフェイスがユーザの生産性に関わる¹¹⁾のであれば、ユーザ・インターフェイスに関わるペリテキストは読者のテキスト解釈に関わるテキスト環境要因といえるだろう。無論テキストをその外部に位置する社会環境要因へと橋渡しするという意味においては、エピテキストも同様にインターフェイスとしての役割を果たしているといえるのであり、そこから総じてパラテキストがもつテキストの内部と外部をつなぐインターフェイスとしての機能が明らかになるといえるであろう。

本論において問題とするのは、ジュネットが示した概念の蓋然性ではもちろんない。そのためには、ジュネットの著した長い論考で提示されたのとは異なる論拠に基づく、より多くの実証的な考察が必要となるだろう。われわれの関心はむしろ、ジュネットの提案の一つであった、作品という聖別された主テキストと *prépublication* との間に設けられた区別を受け入れた上で、*prépublication* を作品から区別しているのは何なのかを検証することである。作品として読み継がれるテキストの解釈と、*prépublication* としてのテキストの解釈は異なるのか？ 異なるのであればどのように異なりうるのか？ こうした素朴な疑問に答えるための予備的考察を提供することなのである。

この問題に答えるために、われわれはまず *prépublication* の社会環境要因とテキスト環境要因の両方を含意することばとして *champ* に注目し、われわれの考察に一般的な性格を与えておくことにしよう。このような考察を経ることで、われわれの関心の在処をテキストとその解釈に限定させることができると考えるからである。この *prépublication* という *champ* は、エピテキストによって現実世界と関わりペリテキストによってテキスト世界と関わっているのであり、二つの世界を結ぶインターフェイスあるいは関として機能している。本論においてはこのインターフェイスとしてのパラテキストが、プリズムがそうするように、印刷されたテキストの光に思わぬマトリクスが潜んでいることを明らかにする場合もあるのだということを、現在調査を進めている *Confluences* 誌を例に検証していく。これらの考察を通じて、パラテキスト分析の重要性とその課題を浮かび上がらせたい。

1. 領野 *champ* としてのパラテキスト

Champ という概念についての考察から本論を始めるのは、われわれの *prépublication* を対象とした考察について、ピエール・ブルデュエの「界 *champ*」概念に触発された場としての〈文学界〉があるのではないかと指摘を想定してのことである。確かにわれわれはアンナ・ボスケッティによる雑誌 *les Temps modernes* を対象とした社会学的研究が

あることを知っている。ボスケッティの研究が日本のフランス文学研究において大きな位置を占めていることは、日本におけるブルデューの受容について概観するだけでも明らかだろう。

ブルデューの名前を付した書籍としては、1987年に山本哲士が著した『ディスクールの政治学：フーコー、ブルデュー、イリイチを読む』が最初である。これは研究者による単著であって、この研究書の刊行をきっかけとして、ブルデューの日本語訳が出版され始めることとなる。最初の日本語訳は、*Choses dites* の原題で1987年に刊行されていた作品を、刊行から2年後の1989年にフランス文学研究者の石崎晴巳が訳出した『構造と実践』である。その翌年に同じくフランス文学研究者の石井洋二郎が、ブルデューの主著の一つ *La Distinction. Critique sociale du jugement* (1979) を『ディスタクシオン：社会的判断力批判』として刊行している。以降、出版社を移して「Bourdieu Library」と題されたコレクションも創設され、毎年のようにブルデューの作品が日本語に訳出されることになる。

ところで、前述したアンナ・ボスケッティの著作 *Sartre et « les Temps Modernes »* は、ブルデューの邦訳を最初に行った石崎晴巳が、『知識人の覇権：20世紀フランス文化界とサルトル』の題で1987年に訳出している。ボスケッティのこの研究は、*les Temps modernes* 誌を中心として如何にサルトルがフランス文化界あるいは知識人界を支配していたのかを社会学的に研究したものである。そして、「界」という用語が日本語題名にも用いられていることから明らかなように、ボスケッティの研究はブルデューの社会学理論に依拠したもの¹²⁾である。この研究において、*les Temps modernes* 誌が同時代の他誌との間に占める社会的位置、サルトル、ボーヴォワールやメルロ＝ポンティといった人物が雑誌に果たしていた役割の分析などが、ブルデューの方法論に基づいて説得力を持って解明されていく。

しかし、われわれの関心は「界」の特性を社会学的に明らかにすることにあるわけではない。むしろ、そうした「界」において展開された個別のテキストを読者が解釈する場合、どのような方向付けがおこなわれるのか？ 読者が *prépublication* のテキストを解釈する場合にどのような条件下に置かれているのか？ われわれの関心は、あくまでテキストの解釈に影響を及ぼす限りにおける「界」の在り様なのである。それゆえ、「資本」や「ハビトゥス」によって「界」を分析し記述するのではなく、そうした分析が解釈にどのような影響を与えるかを考察することが必要になるのである。

いずれにせよ、「界」とは社会学的な次元における考察には有効であるかもしれないが、テキストと解釈という現在のわれわれの関心に十分に答えてくれる概念ではないように思える。われわれの関心にとっては、ブルデューよりもミシェル・フーコーの方が『知の考古学』で展開した *champ* をめぐるもう一つの考察、特に言表 *énoncé* の機能に関わる考察を参照する方が適しているように思われるのである。

ミシェル・フーコーの『知の考古学』が、『言葉と物』にいたるまでの「考古学」的方法論を反省しつつ、「系譜学」への展開を企図することでフーコーの思索において一時期を画する著作であることはよく知られている。「monuments」より「documents」を重視するような新しい歴史学を確立すること、すなわち歴史学における認識論的変動を確たるものとするを旨としてきたと序論において述べた上で、自身が標榜してきた「考古学」という「或る種の無秩序のうちで粗描された」¹³⁾それまでの作品に対する反省の書として、フーコーは同書を位置づけている。

反省され秩序づけられた「考古学」という位置づけをよく確認することができるのは第二章であろう。そこにおいてフーコーは、言表 énoncé の総体としての言説 discours という概念を導入し、言説を「対象 objets」、言表の主体や制度といった「言表の諸類型 modalités énonciatives」、「概念 concepts」、「戦術 stratégies」という4つの異なるレベルにおいて発動される「形成＝編成の規則 [フォーメーション・ルール] règles de formation」によって記述されるべき全体であると述べている。つまり、言説の総体とは語られあるいは書かれる個別の言表から構成されており、それらの言表はフォーメーション・ルールによって規則づけられ、関連しあっているのである。

続く第三章では、言説を実質的に構成している言表という概念が考察される。フーコーに拠れば、言表とは論理的にも言語学的にも言語行為論によっても汲み尽くされることができないような独特な「機能」性をもっている。すなわち言表とは、「自己の物質性の立ち現れると同時に、ひとつの規約とともに出現し、多くの網の目のなかに入り、使用の領野 champs のうちに位置し、可能的な移動と変容に身をさらし、その同一性が保持され、あるいは消え去るさまざまな操作や戦術に自己を統合する」¹⁴⁾(Foucault, 1969: p. 160)ものであるとされる。このことは、われわれが一つの言表を一つのテキストと見なすことができることを示唆している。

そのようなものとして、またその限りにおいて、ひとつの言表は、1)シニフィアン／シニフィエにおけるとは異なる独自の相関物 corrélat をもち、2)作者や発話者とも異なる独自の主体 sujet をもち、3)他の言表との共存の領野を有し、そして最後に4)言表の反復性と書き換え可能性を保証する物質性を、「機能」としてもつとされる¹⁵⁾。言説を構成する要素としての言表は、それ自体は言説に対して原子としての役割を果たしているわけではないが、言説が成立するために必要不可欠な4つの成立要件となっているのである。ここでフーコーが言表を説明する際の拠り所としてもちいている「機能」ということばは、言説全体を完成させるために必要不可欠な領野 champ および言説が現れてくる諸条件を含意している¹⁶⁾ことを忘れてはならない。

ところで本章冒頭で言及したように、領野 champ という用語は「界」と訳されるブルデューの用語と同じことばである。しかし、ブルデューにおけるこの概念が資本やハビトゥスという別の概念と共同して人的資源の関係を記述する場合に用いられるのに対

して、フーコーのそれは人的資源に関わることがらを対象としているわけではないという点において異なる概念となっている。フーコーにおける領野とは、言表あるいはテキストが生じてくる空間であり、その領野を観察者の解釈行為によって他の条件と関連づけることによってのみ言説という全体が帰納的に浮かび上がってくるのである。

これらの「機能」あるいは要件のなかでも、言表の同一性を保証する機能を担うのは言表の物質性であるとフーコーは考える。彼にとって、物質性を奪われた抽象的な言表は存在しないだけでなく、言表を構成する物質がもつ規約が変われば、言表の同一性も変化するのであり、「言表の物質性」の問題は「言表の同一性」の問題と等価で置き換え可能なものとして考察される。

言表の同一性とは、「文の構造よりもいっそう多様であり [中略] ときに、この構造よりもいっそう恒常的である」¹⁷⁾(pp. 158-159) し、「この言表の同一性が文の同一性と比べて厳密に位置づけられえないだけでなく、この同一性は、それ自身相対的であり、言表についてなされる慣例に従い、言表を扱う仕方にしたがって、変動する」¹⁸⁾(p. 159)。結局のところ、「言表の恒常性、さまざまな言表行為の独自の出来事を通じての同一性の保持、形態の同一性を通じてのその二重化、すべてこれらは、〈使用領野〉 [中略] の機能である」¹⁹⁾(p. 159) とされるのであり、言表が現れる「余白」に依存して言表の同一性は変化するとされている。このことが言表の反復可能性の源泉となっているのであるが、そうした言表の性質が有効になるのは「いつでも厳格な諸条件のうちにおいてである」(p. 160) ことも忘れてはならない。

言表の物質性とは、「単に、変化の原理、認知の諸基準の変容、言語学的下位集合の決定、などではない」のであり、むしろ「言表それ自身を構成するもの」としてとらえられている。また、物質性ということばで考えられているのは、「一つの言表が一つの実体、支え、場所、日付を持つことである」²⁰⁾(p. 154) とフーコーが述べているように、言表は物質的・空間的・時間的に規定することができる実在として考えられていることが分かる。かくして、言表における物質性という機能が「言表の同一性」という問題と等価であることが導き出される。

言表を記号の等価物として考えるならば、記号の物質性という視点は先行研究においても問題にされていなかったわけではない。論理学においては理論的な問題として、記号を実現する物質的同一性をどのように保証し規定するかが問題となっているし、言語学においては「物質性と言語体系の間の諸関係」(p. 153) が考察の対象となっている（例えば文字言語やアルファベットの役割）と述べ、フーコーは記号の物質性という論点がこれまでの諸分野の研究においても常に研究対象として存在していたことを確認し、その問題の重要性を強調する。

さらにフーコーは言表の物質性を規定する物質性・空間性・時間性というファクターが、一見すると言表ごとに常に個別で独自なものであるかのように思われるが、実際に

は言表の物質的側面を規定する空間性と時間性については「いくつかの常数 un certain nombre de constantes」を導入することも可能であると主張する。どのような「常数」であるかについては、「文法的、意味論的、論理的なさまざまな常数」(p. 155)と述べるだけで、列挙されたものの他に「常数」があるのかは明言されていない。しかし、こうした「常数」を言表の物質的側面を規定する空間性と時間性に適用することにより、「言表行為の契機とそれを個別化する座標軸とを中性化しつつ、文、意味作用、命題、などの一般的形態を、知ることができる」²¹⁾(p. 155)と主張する。それによって「言表行為の時間と場所、言表行為が用いる物質的な支えは、少なくとも、その大部分は、中性的なものになり、それによって「無際限に繰り返しが可能な」、「分散したさまざまな言表行為を生じせしめる形式」²²⁾(p. 155)を抽出することができるとする。つまり、言表の物質性を考える際には、そうした物質性の諸要素(すなわち、物質性・空間性・時間性)を文法的、意味論的、論理的などの観点から考察して変化しない特徴を導き出してやれば、言表の原型のようなものを抽出できるはずだとフーコーは主張するのである。しかし、フーコー自身も認めるように、このようにして抽出された言表の原型は言表自体とは異なっているのであり、言表の「〈反復可能な物質性〉 *matérialité répétable*」の同一性をいかに保証するかを説明することはできない。

フーコーはここで、「小さな『差異』」という概念を持ちだし文学テキストの例に適用することで、言表の同一性が如何にして保証されるかを述べる。この「小さな『差異』」は「言表の同一性を変質させたり、それから他の言表を立ち現わせたりしない」ものであり、上の例でいえば「『書物』の一般的要素 [中略] のうちで中性化」²³⁾(p. 156)しうるものである以上、「言表の物質性」とは、「占められた空間や明確な表現の日付によっては、およそ規定されず、むしろ、事物あるいは対象の規約によって規定される」²⁴⁾(p. 156)のだとフーコーは主張する。

ここで「事物あるいは対象の規約」と呼ばれるものは、「変容可能な、相対的な、そして常に問い直さうなもの」²⁵⁾であり、「物質的諸制度の複雑な支配とともにかわる」とされる。つまり、「憲法や遺書、宗教的啓示などのテキスト」(p. 157)のように異なる物質性のもとで反復されることによって言表の同一性が失われるものと、異なる物質性のもとに反復されても同一性が失われない言表とが存在しているのであり、その意味において「言表が必然的にしたがう物質性の支配は、それゆえ、空間的=時間的局在化にかかわるよりも、制度の秩序にかかわ」っており、それによって「限界をもった、消滅しやすい個別性よりも、〈書き換えや転写の可能性〉を規定する」²⁶⁾(p. 157)のだとされる。このようにして、「言表の物質性」は空間的・時間的な同一性からとらえるべきではなく、言表を物質的に支えているものの制度という観点からとらえるべきであるとのフーコーの主張が導出されるのである。

以上概観したように、フーコーは、テキストとしての言表の同一性や〈書き換えや転写の可能性〉を保証する機能として、制度としての言表の物質性に言及する。フーコーにとって、物質性に支えられた言表は、物質に付随するさまざまな規約によって条件付けられ限定されているのである。この言表の機能は、記述されることによって、他の機能についての記述とともに言説全体へと組み込まれていくわけだが、それは言表の機能の解釈を通して言説を生成することを意味する。

翻って、*prépublication* という領野を記述する際に必要とされるのは、その領野における物質性という機能が行使する制度としての規約を、記述によって明らかにすることであろう。そして、そうした制度が読者に対してどのような影響を及ぼすかを知るためには、テキストにおいてインターフェイスとしての役割を果たしているパラテキストの記述と分析を通して明らかにしていくことが必要なのである。

2. パラテキストの記述分析

前章において述べたような方法論的な問題意識に支えられて、現在ドイツ占領下のフランスにおいて発行されていた文芸誌を対象とした調査を行っているところである。中でも調査の対象を文芸誌 *Confluences* 誌²⁷⁾ に絞っているが、それは同誌がジャン＝ポール・サルトルの *Baudelaire* (1947) の成立過程を研究する上で²⁸⁾ 重要であるからに他ならない。ヴィシー政権下において刊行が始まったとされるボードレール論の *prépublication* を追跡調査する中で、同誌の存在が浮かび上がってきたのである。本章ではこの *Confluences* 誌を事例に、*prépublication* の領野におけるパラテキストの記述分析がどのようなものでありうるのかについて考察することにしよう。

まずはテキストの外部である社会環境要因について記述することから始めよう。

Confluences 誌は1941年にリヨンで創刊された文芸雑誌で初代の主幹はジャック・オバンクで、1941年9月の第3号まで務めた後、1944年12月まではルネ・タヴェルニエが主幹を務めている。1941年に発行された第1号に始まるシリーズは1944年12月・1945年1月の2号分(37/38号)の合併号を最後に刊行するまでの3年半の間に34号を発行して一旦終了している。そして、1945年1月号から改めて「*nouvelle série*」として編集部をリヨンからパリに移して発行を再開している²⁹⁾。戦後の「新シリーズ」では、雑誌の主幹を5号まではタヴェルニエが引き続き務めてはいるものの、主筆としてルネ・ベルトレが加わり、さらに6号からは主幹の役割もタヴェルニエからベルトレに引き継がれている。新シリーズ移行後の同誌の活動は占領下の活動と比べて活発とは言い難く、1947年までに11号を発行しただけで廃刊している。

ドイツ占領期のフランスにおける印刷物の発行については、1940年6月22日の独仏

休戦協定締結後の8月から既に、ドイツによる検閲体制の下に置かれていたことはよく知られている³⁰⁾。Armand Colin社のルネ・フィリポンは、1940年7月25日にドイツ側と出版活動の再開について交渉を開始し、9月28日に「検閲協定 *convention de censure*」³¹⁾として出版社とドイツとの間で取り交わされた文書に基づいている。この協定はドイツによる強制的な検閲を義務づける内容ではなく、むしろ出版社側の自主規制を基本とし、出版社が判断できない場合にドイツの「フランス宣伝部 *Propaganda-Abteilung Frankreich*」へと伺いを立てるという内容だった³²⁾。この協定が、フランスの出版社および *Mesaggeries Hachette* 社の全面的な協力を得て、3度にわたって発行されることになる「オットー・リスト」へと結実することになる。

独仏休戦協定に先んじて1940年6月14日にドイツ軍はパリに到着していたが、休戦協定締結後の6月30日に、日刊紙 *le Figaro* などの運搬会社であった *Mesaggeries Hachette* 社を接収する。ドイツ軍はドイツ本国において作成していた禁書リスト「ベルンハルト・リスト」³³⁾に基づき、主に政治的な内容を含む143タイトルを禁書扱いにする。しかし、当時の駐仏ドイツ大使オットー・アベッツはこのリストが不十分であると判断し、自らの名を冠した「オットー・リスト」をフランス出版界、特に *Mesaggeries Hachette* 社のアンリ・フィリパッキらの協力を得て作成したのである。

最初の「オットー・リスト」は、1940年10月4日に« *Liste Otto. Ouvrages retirés de la vente par les éditeurs ou interdits par les autorités allemandes.* »³⁴⁾の題名で印刷される。リストに含まれていたのは反ドイツ的作品やユダヤ人作家による作品それに反コミュニスト的な作品で、1941年7月に *Bibliographie de la France*誌³⁵⁾に補遺が掲載されている³⁶⁾。第2のリスト³⁷⁾は当時の出版組合の会長だったルネ・フィリポンの署名を付した諸言とともに1942年7月8日付で発行される。この諸言は1943年5月10日に発行された第3のリスト³⁸⁾にも継承されている。

検閲協定は書籍に関してのみ規定をしていたが、実際には雑誌などの定期刊行物にも適用されたのであり、フランスにおける出版物はドイツ軍による検閲の下にあったのである。事実、出版組合はヴィシー政府に対して1940年12月6日付で、定期刊行物への検閲に関する質問状³⁹⁾を提出している。一方でパリから自由地区への出版物の流通が開始されたが、その任を託されたのは *Mesaggeries Hachette* 社であった。ヴィシー政府は自由地区での出版物の運搬に関わる業務を遂行する会社の資本の80%がフランス人に所有されかつ会社の経営者がフランス人であるという規定を作成することで、業界の再構築を図るが実際にこうした措置が発行されるのは1941年5月3日になってからである。

実際 *Confluences* 誌でも第1号と第2号には巻末に検閲された日付が掲載されている⁴⁰⁾。しかし、第3号から早くも検閲日の掲載は省略されている。とはいえこのことは、「自由地区」において「占領地区」ほどの厳しい検閲が実施されていなかったことを意

味するものでももちろんない。*Confluences* 誌の発行が開始された後ではあるが、1942年4月17日からドイツ軍は、書籍に関しては検閲提出用の書物を発行することを義務づけた。そのため、ヴィシー政府では組織委員会 Comité d'organisation の中に置かれていた出版用紙管理委員会 Commission de contrôle du papier d'édition に対して、出版に必要な用紙の調達と同時に、出版社が出版を予定している署名一覧をドイツ軍に具申する任務を負わせている。ドイツ軍による出版物を対象とした検閲は1944年8月のパリ解放の時まで続けられる。こうした状況下において *Confluences* 誌は、ヴィシー政府およびドイツ軍によって認可された雑誌として刊行を始めているのである。

以上のような社会環境要因をエピテキストとして、主テキストである *Confluences* 誌に結びつけることが可能である。つまりそれらの社会環境要因を主テキストに付随するペリテキストに認めることもできるのだ。

1941年の第1号を見ると、表紙および裏表紙に「Revue mensuelle」とあり、目次の役目も果たしている表紙からは、同号においてライナー・マリア・リルケの手紙を大きく扱っていることがわかる。巻頭を飾るのは「Options et positions」と題されたコーナーで、そこには創刊の辞⁴¹⁾が掲載されている。

戦時下において多くの人々が戦い苦しみ、アングロ＝サクソンの文化への従属が強いられている中、詩人は外の世界に居場所をなくし内の葛藤に苦しんでいる。しかし詩人も内情を表出させねばならない。書くことは必ずしも政治的になることを意味しないのであり、芸術にのみ心を砕いて書かねばならない。無論そうした芸術が成り立つためには、それを庇護してくれるものが必要だが、下卑た芸術では庇護すらされないだろう。そうであればこそ、フランスの詩的伝統を忘れることはできないのであり、そうした伝統に立脚して、困難な時代にあってもなお、若人は新たに人間の真実をつかもうと努力するのだ。だからこそ「戦争が中断させていた *Confluences* 誌を今日再開する Pour en témoigner, nous reprenons aujourd'hui « Confluences », que la guerre avait interrompue。」のだと述べているのである。こうして「*Confluences*」という名を冠した雑誌が第二次世界大戦前にも存在しており、それを敢えて1941年に再開したことが明かされているのである。

ドイツ占領下のフランスにおいて出版許可を得ていた出版物の一覧を作成したドンナ・エヴレスの資料は、*Confluences* 誌について次のように付記している：

CONFLUENCES. In Lyon. Monthly. 1941-1943. Literary magazine. "The staff of CONFLUENCES has sought since 1941 to give a precise and documented picture of French intellectual activity." Resumed publication after the war. (Bibliothèque Nationale de France)⁴²⁾

エヴレスが作成した資料は、1942年から1944年までの *Annuaire de la Presse* にフランス国立公文書館の「F41」シリーズとフランス国立図書館の「Bibliographie de la presse française politique et d'information générale 1865-1944」を対象として行った調査に基づいている⁴³⁾。1944年までを対象とした同書において、*Confluences* 誌は1943年に刊行が停止されたことになっているが、現在のフランス国立図書館のデータベースでは、本章の冒頭で述べたように1944年以降も刊行を続けたことが確認される。ただし、1941年の創刊号がそれ以前に発行されていた雑誌を引き継いでいるとの記述はない。しかし、1941年の創刊号が「新シリーズ」であることは、1頁目に「NOUVELLE SÉRIE No. 1 JUILLET 1941」と記されている⁴⁴⁾ことから確認することができる。また、この点についてはフランス国立図書館のカタログでも同様の記述⁴⁵⁾が見られることから確認することができる。

第1号は、「Les Idées et les Œuvres」と「Le Monde et les Hommes」の2部構成になっており、前半の「Les Idées et les Œuvres」は、当時捕囚の身にあったポール・リクールによる「le Risque」と題されたテキストである。その他には「Poèmes」と題して4号以降同誌の主幹を務めるタヴェルニエ自身が6編の詩を寄せているのに目が引かれるが、それ以上にリルケの書簡4編が「Lettres」と題された部分でフランス語に翻訳され掲載されており、同号の中心に位置づけられていることは、先に触れたとおりである。「Les Idées et les Œuvres」のパート全体では14編の作品が掲載されている。

続く「Le Monde et les Hommes」のパートは、主として批評テキストが掲載されており、パート全体はさらに「Les livres」、「Les revues」、「Les arts」の3つに分けられている。つまり書籍、定期刊行物、上演された劇や映画についての批評テキスト⁴⁶⁾が掲載されているのである。「Les livres」と題された書評欄には合計17編のテキストが掲載されており、そこではダニエル・アレヴィの *Péguy et les Cahiers de la Quinzaine* (1918)⁴⁷⁾ や、1924年にアカデミー・フランセーズ会員に選出されていたジョルジュ・ルコントの小説 *La Rançon* (1941)⁴⁸⁾、それにデブリュイェールの *Face à l'épreuve avec Pascal* (1941)⁴⁹⁾ などのフランス文学関係のテキストはもちろんのこと、リュシエンヌ・エスクブの *Emily Brontë et ses démons* (1941)⁵⁰⁾ のように前世紀のイギリス文学作品を対象とした書籍も書評の対象となっていることがわかる。

興味深いのは「Les revues」のパートには「Memento」と題されたパートを含んでおり、そこではフランスで発行された雑誌の掲載内容の梗概が、雑誌社の住所とともにまとめられていることであろう。第1号ではマルク・バルベザが1人で15の雑誌を取り上げてコメントしている：*Arbalète* (8, rue Godefroy, Lyon)⁵¹⁾、*Cahiers du Sud* (10, cours du Vieux-Port, Marseille)⁵²⁾、*Divan* (37, rue Bonaparte, Paris)⁵³⁾、Éditions des îles de Lerins (86, boulevard de Cessole, Nice)、*Esprit* (Boîte postale 62, Lyon-Terreaux)、*Figaro littéraire* (12, rue de la Charité, Lyon)、*Fontaine* (43, rue Lys-du-Parc, Alger)⁵⁴⁾、*Gilde du Livre* (1, rue du Lion-

d'Or, Lausanne, Suisse)⁵⁵⁾, *Marsyas* (Saint André Peyre Murevigne, Aigues-Vives, Gard)⁵⁶⁾, *Messages* (Jean Flory, éd., 140, boulevard Saint-Germain, Paris)⁵⁷⁾, *Nouvelle Revue Française* (5, rue Sébastien-Bottin, Paris, 7^e), *Poésie 41* (Pierre Seghers, Les Angles, par Villeneuve-lès-Avignon, Gard)⁵⁸⁾, *Suisse contemporaine* (22, boulevard de la Forêt, Lausanne-Rosiaz)⁵⁹⁾, *Traits* (Case postale Saint François 1.725, Lausanne, Suisse)⁶⁰⁾, *Tunisie Française Littéraire* (4, passage Saint-Jean, Tunis). 今日ではフランス国立図書館の蔵書目録からもれている雑誌もあるが、何よりも自由地区で発行されていた雑誌に限らず、パリやアルジェリアやチュニジアなど自由地区の外で発行されている雑誌も数多く扱われていることに気づく。

こうした誌面構成は、パート名こそ第3号から変更されてはいるものの⁶¹⁾、基本的には最終号まで変更されずに踏襲されている。さらに1943年3月に出された第18号からは *Confluences* 誌に対する他誌の評価が「*Revue de Presse*」のパートに引用され掲載されるようになる。興味深いのは高い評価と辛辣な批判の両方が混在していることであろう。

リヨンの *Le Pays libre* 誌⁶²⁾が“confluence”ということばについてラルースを繙き、「多くの膿疱を発症する皮膚の感染症をさす」⁶³⁾と悪意に満ちたコメントを発していることを掲載する一方で、その直後に *Vivre* 誌⁶⁴⁾の「*Confluences* 誌は「自由地区」の N.R.F. 誌だ」⁶⁵⁾という讃辞も並記している。このパートからは同誌が自由地区において発行されていたものの、パリを含む占領地区にも流通していたことがわかる。例えば、ジョルジュ・シュアレスのいた *Aujourd'hui* 誌⁶⁶⁾は、*Confluences* 誌がジャン・プレヴォを迎えて組んだ特集「小説の問題」号を高く評価する記事⁶⁷⁾を紹介している。シュアレスが対独協力作家として知られており、この *Aujourd'hui* 誌もまたドイツの強い支援を受けていたことを併せて考えると、このように他誌の評価を掲載することは、検閲を行う側に対するアリバイ作りという側面も見えてくるのかもしれない。

当然のこととはいえ、*Confluences* 誌のようにドイツ占領下のフランスという特殊な状況下において刊行され続けた印刷物について記述する場合には、当該の印刷物を取り巻く社会環境要因について記述することが求められることは言を俟たないだろう。それは単に刊行を条件付ける行政的あるいは法的措置を考慮に入れるだけでは不十分なのである。本章において見たように、それらの社会環境要因のおのおのがどのように印刷物の内容面に影響を及ぼしているのか、エピテキストとペリテキストとの関わりを記述することも重要になるだろう。

インターフェイスとしてのパラテキストを記述することは、そこに掲載された作者の人間関係を再構築することを目的とするのではないのであり、あくまで *prépublication* の領野の内に、暫定的には範囲を限定した上で、その領野を満たすテキスト同士の関係を見極めることが必要になってくる。とはいえ、現在 *Confluences* 誌を対象に行っている調査がテキスト同士の関係について詳述することができる段階には至っていないこと

は認めなければならないだろう。その上で、他誌との関係も視野に入れたテキスト間の関係性の再構築を行う必要があることはいうまでもない。

3. パラテキストの罫

前章において述べたように、本論が対象としている *Confluences* 誌は、「戦争によって中断されていた雑誌」を再開させた「新シリーズ」で、1941年から1944年12月まで継続して刊行されていた。ヴィシー政権が崩れドイツによる直接支配が始まったのはこの次期であり、1944年8月にはパリが解放される。雑誌の刊行もそれと連動して変化に富んだ社会環境要因によって条件付けられることになる。すなわち、このことはドイツ軍による出版物に対する検閲制度の適用がパリ解放によって解除されることを意味しているものであり、雑誌の内容についても大きな変化が生じたと仮定できる。そこでパリ解放前後に刊行された第33号(1944年7月号)および第34号(1944年8月号)の *Confluences* 誌を概観し、定期刊行物の発行に対してパリ解放がいかなる影響を与えたのかを見ていくことにしよう。

本章において考察の対象とする2号に限らず、創刊当初から同誌は裏表紙に目次ではなく編集部に関する情報や地域ごとの販売価格⁶⁸⁾を掲載していた。その裏表紙から読み取ることができる限りにおける同誌の編集体制は次のようなものである。すなわち、第1号では«DIRECTEUR: JACQUES AUBENQUE», «DIRECTION, REDACTION ET ADMINISTRATION: 26, PLACE BELLECOUR, —LYON, 2^e—»とオバンク一人で編集を切り盛りしていることになっているが、第2号(1941年8月号)の裏表紙では«SECRÉTAIRE GÉNÉRALE: MARC BEIGBEDER»と記され、あらたにマルク・ベグビデールの名が挙げられている。事務局長としてのベグビデールの名は第3号(1941年9月号)の裏表紙からは削られるが、第4号(1941年10月号)からはオバンクに代わってタヴェルニエが編集長になり、郵便振替口座も名義だけがタヴェルニエに代わっている⁶⁹⁾。

また、創刊号から記載され続けていた住所も、第4号では「暫定的に provisoirement」という説明が添えられ、果たして第5号(1941年11月号)では«4, RUE CHAMBOVET —LYON 3^e—»へと変更されている。最初の住所«26, Place Bellecour»はリヨンの中心を流れるローヌ川とソーヌの合流地点(confluences)にあったが、そこから同じリヨンの市内の3区とはいえ東の果てへと移転したわけである。編集に携わる人物の変更としては、第4号以降は変更が見られず第33号(1944年7月号)になって「編集実務責任者 secrétaire de rédaction」としてジョルジュ・ルルウの名が加えられることになる。

さらには「通信員 correspondants」の記載も第19号(1943年4-5月号)から認めるこ

とができる。第19号ではサンジェルマン＝アン＝レの住所とともにクロード・モルガンという人物が「北地区通信員 *Correspondant en Zone Nord*」⁷⁰⁾として記載されている。第28号からはさらにパリの住所と併せてピエール・レリスの名前が加えられている⁷¹⁾。

Confluences 誌の流通範囲を考える上では、「総代理店 *Dépositaires généraux*」の項目が参考になる。この項目は第14号から記載が始められており、フランス («*France : « Confluences », 4, rue Chambovet, LYON (3^e), / Tél. : Villeurbanne 72-17.*»), アルジェリア («*Algérie : Messageries Hachette, 49 bis, rue d'Isly, / ALGER. — C. C. P. Alger 23.*»), モロッコ («*Maroc : Messageries Hachette, 1, Rond-Point La Pérouse, CASABLANCA. — C. C. P. 130 Rabat.*»), チュニジア («*Tunisie : Ed. Saliba et Cie, 11, passage du Maroc, / TUNIS — C. C. P. 1.99.*»), スイス (*Suisse : Librairie de l'Université, FRIBOURG. — C. C. P. / 11 a 163.*) における代理店業者とその住所が挙げられている。前章において述べたように、パリが占領されると同時に *Messageries Hachette* 社はドイツ軍に接収されていたが、フランス、アルジェリアそれにチュニジアの三カ国での代理店業務は、まさしくこの *Messageries Hachette* 社が請け負っている。

第14号以降に掲載されている代理店についての記述を見てみると、第15号(1942年12月号)で早くも変更が加えられる。フランスとスイスについては第14号で告知された代理店が引き継がれているが、ポルトガル、ルーマニア、トルコ、ハンガリー、ブルガリアでの代理業務が、アシェット社の海外部門へと担当が変更されている⁷²⁾。第30号(1944年3-4月号)からは、単に「外国 *Etranger*」とだけ示されるように表記が変更されてはいるものの、代理業務はアシェットの海外部門が続けて担当している。また代理店についての表記は、パリ解放後の第35号(1944年9-10月号)まで続けられており、第36号および最終号となる第37-38合併号では、総代理店の記述自体が省略されている。

Confluences 誌は地下出版ではないので、印刷所についてはそれほど問題とならないかもしれない。実際ほとんどの号でリヨンの«*G. NEVEU & Cie*»が印刷所として記載されている⁷³⁾。同印刷所で印刷されていないのは、第21-24合併号(1943年7-8月号)と第33号(1944年7月号)、第34号の印刷を担当した«*Générale Lyonnaise*»⁷⁴⁾だけである。それ以外の場合には印刷所自体の記述が省略されている。

以上のように、同誌の編集体制、流通体制、印刷体制について、同誌の記述に基づいて概観した。これらからわかるのは、創刊時と終了時に若干の変更が見られるものの、編集長のタヴェルニエがリヨンを拠点にリヨンで印刷し、それをフランス国内だけでなく広く海外にも配本していた様子を伺うことができる。ただし、注意しておく必要があるのは、海外への配本はドイツ軍に接収された *Messageries Hachette* 社などのアシェット社の関連会社が担当していたということであろう。このことは海外への配本の可能性と引き替えに、ドイツ軍の検閲を常に意識しなければならない状態に当時の定期刊行物が置かれていたことを意味するのである。

問題は読者がそうした制約をどの程度感じながら雑誌を購読していたかということであろう。既に言及したように、*Confluences* 誌の第1号および第2号においては同誌がドイツ軍の検閲を経て刊行されているということは明記されている以上、同誌の内容が多かれ少なかれ、というのは検閲の実情が読者には知られていなかっただろうと想定するからだが、ドイツ的なものになっていると考えていたであろうと推測することができる。これらがパラテキストの記述分析から最小限に見積もった場合の*Confluences* 誌の物質性の規約ということになるだろう。こうした記述分析によって明らかにされたのは、テキストに外在する世界なのであり、その意味においてテキストの物質性はテキストの内と外とを媒介させるインタフェースとしての役割を果たしているといえるのである。

ところが一つ大きな問題が生まれる。パリ解放後に刊行された最初にあたる*Confluences* 誌第34号では、解放される喜びとともにヴィシー政権下およびドイツ軍による占領下における定期刊行物の発行の苦労話が「*Victoire en chantant...*」⁷⁵⁾というタイトルで綴られている。その中で作者のタヴェルニエは1942年の2号の休刊が実はドイツ軍の検閲の結果であったことを告白している。

Sitôt les difficultés des premiers mois traversés, il fallut affronter un plus grave orage : le 16 août 1942, je recevais de Paul Marion un télégramme officiel (sur formule jaune) :

Secrétaire Etat Information à Tavernier, directeur Confluences,
4, rue Chambovet, Lyon (Rhône).
85 off. Vichy 232-25-16-1300

Ai reget suspendre Confluences pour ses deux prochains numéros, en raison publication poème M. Aragon,

Ainsi *Confluences* fut la seule revue littéraire à subir une mesure de ce fait : on fit sur notre tête un exemple.⁷⁶⁾

事実、このポール・マリオンからの電報にて告げられているとおり、同誌12号（1942年8月号、9月号）は欠号となっている⁷⁷⁾。同誌はルイ・アラゴンの詩⁷⁸⁾を掲載したことで、発行停止の処分を受けた「唯一の文芸誌」ということになったわけだが、アラゴンの詩を掲載することをあきらめたわけではない。ここでもパリ解放後の*Confluences* 誌の記述がわれわれにアリアドネの糸となる。

同誌の第35号（1944年9-10月号）は、去る1944年1月にパリにて病死したジャン・ジロドゥに捧げられた特集号と銘打たれている。タヴェルニエは同号の序文で、この特集をパリ解放以前から企画を練り上げてきたことを告白しているが⁷⁹⁾、その中でアラゴンに言及して次のように述べている。

Dire tout cela, dans notre France libérée est déjà poignant. Plus poignant encore ce témoignage rendu à Jean Giraudoux, symbole de l'espoir libre, ingénieux et fier, par des écrivains qui ont souffert, qui ont travaillé dans la clandestinité.

Remarquons à ce titre l'article d'Aragon qui devait paraître sous la signature « Wattelet », être écrit par un personnage mythique : Aragon avait inventé un vieil érudit de province portant le nom de ce peintre du XVIII^{me} siècle, mais après quelques lignes sa verve, son génie l'entraînaient et il n'y avait qu'Henri Massis pour se tromper et voir dans les Meyzargues, Wallelet et autres Blaise d'Ambérieu de brillantes jeunes recrues pour la Revue Universelle...⁸⁰⁾

ここではっきりと書かれているように、同号に掲載されたアラゴン名義のテキスト「Jean Giraudoux et l'Achéron」は、アラゴンが用いていた「Wattelet」⁸¹⁾という筆名を使って掲載する予定だったものである。言い方を変えれば、アラゴンはこの筆名の下で同誌に詩を掲載し続けていたことが、このタヴェルニエの序文で証言されているのである。

強調しなければならないのは、認可された雑誌であろうがなかろうが、北地区であろうが南地区であろうが、自由な出版はドイツ占領下にあっては保証されていなかったということである⁸²⁾。そのような状況下にあって、雑誌に掲載されるテキストには一種フィルターのようなものがかけられた状態になっていることが分かるのである。

こうした指摘がよりはっきりとした現実味を帯びてくるのが、本章の冒頭で引用したテキストの直前に置かれた次の段落を読むときであろう。

*Dès l'abord, la parution de *Confluences* ne put avoir lieu que grâce à un tour de passe-passe favorisé par la sottise des fonctionnaires de l'Information vichyssoise. *Confluences* obtint l'autorisation de paraître en faisant croire qu'il s'agissait d'une re-parution.⁸³⁾*

ここでは「*Confluences* 誌が再刊行であるということ信じさせることによって出版許可を得た」とはっきり証言されているのを確認することができる。このことは、*Confluences* 誌の1941年第1号で書かれていた刊行の経緯も、第1頁に印刷されていた「NOUVELLE SÉRIE」という文字も、検閲の目を欺くための「手品」の一芸に過ぎなかったわけである。*Confluences* 誌が弄した策略についてカリゲルは、検閲を逃れるために、偽の表紙を作ってそこに「nouvelle série」と記載していたと正しく報告している⁸⁴⁾。

とすると、次のような疑問が湧き出てくる。当時この雑誌を手にした人々は、同誌に関わるこうした経緯を知っていたのだろうか？ これについては、否定的な答えの方が現実味を帯びているように思える。つまり、*Confluences* 誌の創刊の経緯を多くの読者は知らないまま、送られてくる各号を読んでいたのであり、だからこそ同誌から読者へ向けた呼びかけが繰り返し同誌上で繰り返されることになる。

頻繁に行われている呼びかけには、定期購読に関するものと原稿の返却に関するものがある。定期購読の呼びかけは印刷用紙の供給不足に端を発しており、早くも第3号の裏表紙の裏頁で遅配についての注意書きが出されている⁸⁵⁾。用紙の供給不足については第5号でも「AVIS IMPORTANT aux lecteurs de cette revue」と題されたテキストが掲載され、そこにおいて定期購読を推奨しない旨の注意書き⁸⁶⁾を認めることができる。これに関する注意書きは第11号まで再び掲載されることはないのだが、第11号では第5号とは反対に定期購読を勧める内容に変更されている点は興味深い。

同誌から読者への呼びかけとしてもう一つ興味深いのが、投稿原稿の扱いに関する注記である。創刊号から既に、「掲載されなかった原稿は返還しない」⁸⁷⁾と裏表紙に明記してあるのを確認することができる。創刊号の時点で実際にどれほどの投稿原稿があったのかはもちろん分からない。しかし、この記述は早くも第4号から削除されてしまう。その代わりに第7号では、返信用封筒に切手の貼ってない原稿については返却しないという⁸⁸⁾、対応に変更されているのである。このことは、実際に読者からの投稿原稿が多く寄せられていたことの証と考えることができるだろう。

結局読者は、*Confluences* 誌を取り巻いているいくつかの重要な問題については、知らされぬまま主テキストを解釈することになっていたのである。そうした解釈の環境を整えることは、読者のテキスト理解のためというよりも、雑誌側がテキストを取り繕うことを目的としていたのである。つまり *prépublication* という領野を擬装するためのツールとして、パラテキストが用いられたと考えることができるのである。

こうしてわれわれは、パラテキストの一つの可能性、すなわちテキストの内と外を単につなぐのではなく、プリズムのように光を分解し場合によっては歪曲すらする可能性を、実例として突きつけられる。パラテキストが存在するのは、テキストが物理的な支えとともに流通し解釈されるからである。パラテキストは、テキストの物質性の証として、テキストの内と外をつなぐインターフェイスとして、主テキストに副次的な役割しか担っていないかのように思われた。しかし、*Confluences* 誌のパラテキストを、その物質的規約という観点から記述することによって、単なるインターフェイスとしての役割に収まっているのではなく、パラテキストが読者の解釈を誘導するツールとして用いられる可能性を確認することができたのである。そしてそのツールは、*prépublication* の領野が物質性を介して読者に押しつけてくる解釈に関わる規約の一つとしての役割をもっているのである。

おわりに

ジュネットが提示した一連の *transtextualité* に関する研究の中で、パラテキストはテキストの内と外を何の変換もせずに関係する機構として捉えられてきた。本論におい

てはパラテキストをテキストの内と外を結ぶような領野 *champ* としてとらえ、フーコーの考察を概観し、そうした領野が要求する解釈の制度としての規約を明らかにすることが重要だと認識を得た。その上で、ドイツ占領下のフランス「自由地区」において創刊された *Confluences* 誌を例に、そのパラテキストの記述を通して *prépublication* という領野を支配する規約を明らかにしようと試みたのである。

確かに、パラテキストは主テキストの社会環境要因とテキスト環境要因の両方を結びつける役割を果たしていた。しかし、*Confluences* 誌の例は、積極的にパラテキストを操作することによって、雑誌が領野を特徴づけ、読者の解釈に領野の規約を押しつけていた可能性を明らかにしていた。

パラテキストを操作したことによって、読者がどのように導かれたのか、具体的に *Confluences* 誌という領野が読者に従うことを求めた規約というのがいかなるものだったのか、これについては同誌に掲載された文芸テキストを対象として、より厳密で詳細な分析が必要となるだろう。そのためにも、同誌を対象としたより詳細な調査が必要となってくることは間違いない。

注

- 1) 日本語訳では「超テキスト性」という訳語が与えられているが、このことばはむしろ「テキスト超越性」とか「テキスト関係性」とでもいうべきものである。というのも、ジュネットがこのことばで問題にしているのは、テキストを関係づけるテキストの性質であり、「テキストの超越性」だからである：« — Par le texte, à l'occasion et pour changer, ou, second degré, sortir de la sortie. Mais il est de fait que pour l'instant le texte (ne) m'intéresse (que) par sa *transcendance textuelle*, savoir tout ce qui le met en relation, manifeste ou secrète, avec d'autres textes. J'appelle cela la transtextualité, et j'y englober l'intertextualité au sens strict (et « classique », depuis Julia Kristeva), c'est-à-dire la présence littérale (plus ou moins littérale, intégrale ou non) d'un texte dans un autre : [...] » (Genette, 1979 : p. 87.)
- 2) Genette, 1982 : pp. 10–11. ジュネットは *Seuils* (1987) において、パラテキスト概念の低位区分を概観する際に同様の例を繰り返している：« Si l'on adopte comme point de référence la date d'apparition du texte, c'est-à-dire celle de sa première édition, ou originale, certains éléments de paratexte sont de production (publique) antérieure : ainsi des prospectus, annonces « à paraître », ou encore des éléments liés à une prépublication en journal ou en revue, qui parfois disparaîtront au volume, comme les fameux titres homériques des chapitres d'*Ulysse*, dont l'existence officielle aura été, si j'ose dire, entièrement prénatale : paratextes antérieurs, donc. » (Genette, 1987 : p. 11.)
- 3) 日本語訳では「雑誌に連載されていた時点」と、「*prépublication*」ということばは「雑誌」ということばで一括りに置き換えられてしまっている。しかし、本論においては、作品が単行本として（とはいえこの定義づけもかなり曖昧なものではあるが）出版されるのに先立って公表されたテキストを問題にするために、あえて「*prépublication*」と表記する。
- 4) 本論では作品をなし文学研究などで考察の中心となるテキストのことを「主テキスト」と仮に呼ぶことにする。
- 5) ジュネットは *Palimpsestes* (1982) の定義づけに大きな変更を加えることなく、*Seuils* (1987) の一冊を用いてパラテキスト概念を詳述している：« [...] ce que l'on ne peut guère nommer que son

paratexte : titre, sous-titre, intertitres; préfaces, postfaces, avertissements, avant-propos, etc.; notes marginales, infrapaginales, terminales; épigraphies; illustrations; prière d'insérer, bande, jaquette, et bien d'autres types de signaux accessoires, autographes ou allographes, qui procurent au texte un entourage (variable) et parfois un commentaire, officiel ou officieux, dont le lecteur le plus puriste et le moins porté à l'érudition externe ne peut pas toujours disposer aussi facilement qu'il le voudrait et le prétend. » (Genette, 1982 : p. 10.)

- 6) 同じ空間のなかでテキストを取り巻いているテキストで、タイトルや序文、さらには章題や注などをさす : « [...] : autour du texte, dans l'espace du même volume, comme le titre ou la préface, et parfois inséré dans les interstices du texte, comme les titres de chapitres ou certaines notes ; j'appellerai *péritexte* cette première catégorie spatiale, certainement la plus typique, et dont traiteront nos onze premiers chapitres. » (Genette, 1987 : p. 11.)
- 7) 距離を置いてテキストを取り巻き、少なくともその最初は書籍の外側に位置づけられていたもので、インタビューや対談などのようにメディアが介在する場合や、書簡や日記などのように私信などの場合がある : « Autour du texte encore, mais à distance plus respectueuse (ou plus prudente), tous les messages qui se situent, au moins à l'origine, à l'extérieur du livre : généralement sur un support médiatique (interviews, entretiens), ou sous le couvert d'une communication privée (correspondances, journaux intimes, et autres). C'est cette deuxième catégorie que je baptise, faute de mieux, *épitexte*, et qui occupera les deux derniers chapitres. » (*Ibid.*) エピテキストについては、ミシェル・フーコーの『知の考古学』に対するエピテキストとして、*Cahiers pour l'analyse* 誌を取り上げて分析した。(重見, 2011 : pp. 11-40.)
- 8) « Comme il doit désormais aller de soi, *péritexte* et *épitexte* se partagent exhaustivement et sans reste le champ spatial du *paratexte*, *paratexte* = *péritexte* + *épitexte*. » (Genette, 1987 : p. 11.)
- 9) 次章においてフーコーの *champ* という概念について概観するが、フーコーとジュネットの考察対象となるテキストに対する態度の違いは、稿を改めて論じる必要があるだろう。ここでは簡単に問題点を指摘するだけで満足することにする。すなわち、フーコーが考察の対象となる主テキストを指定しないのに対して、ジュネットにおいては主テキストが指定されるのである。
- 10) パラテキストのインターフェイスとしての役割については、次の論文において web テキストを例に考察している (SHIGEMI, 2011)。
- 11) この点に関しては例えばコンピュータのユーザ・インターフェイスについての入門書でも冒頭において強調される : « Is good design important? It certainly is! Ask the users whose productivity improved 25 to 40 percent as a result of well-designed screens, or the company that saved \$20,000 in operational costs simply by redesigning one window. » (Galitz, 2007 : p. xix.)
- 12) ボスケットティ自身、同研究の理論的背景を序文において次のように述べている : « Parler de *champ intellectuel*, c'est indiquer la principale référence théorique et méthodologique de mon analyse : les travaux de Pierre Bourdieu et de tous ceux qui s'inspirent de sa démarche, où la notion de *champ* joue un rôle central. Sans prétendre résumer les différents aspects de cette vaste production, j'évoquerai succinctement les principes auxquels je me réfère le plus directement. » (Boschetti, 1985 : p. 7.)
- 13) « Ces tâches, elles ont été esquissées dans un certain ordre, [...] ». (Foucault, 1969 : p. 25.)
- 14) « [...] l'énoncé, en même temps qu'il surgit dans sa matérialité, apparaît avec un statut, entre dans des réseaux, se place dans des champs d'utilisation, s'offre à des opérations et à des stratégies où son identité se maintient ou s'efface. » (Foucault, 1969 : p. 138.)
- 以下本章における本文中の頁番号は同書日本語訳の頁番号をさす。
- 15) « [...] et cette fonction, au lieu de donner un « sens » à ces unités, les met en rapport avec un *champ d'objets*; au lieu de leur conférer un sujet, leur ouvre un ensemble de positions subjectives possibles; au lieu de fixer leurs limites, les places dans un domaine de coordination et coexistence; au lieu de déterminer leur identité,

- les loge dans un espace où elles sont investies, utilisées et répétées. » (*Ibid.* : p. 139.)
- 16) « Bref ce qui s'est découvert — ce n'est pas l'énoncé atomique — avec son effet de sens, son origine, ses bornes et son individualité — c'est le champ d'exercice de la fonction énonciative et les conditions selon lesquelles elle fait apparaître des unités diverses ([...]). » (*Ibid.* : pp. 139-140.)
- 17) « Là encore, il ne s'agit pas d'un critère d'individualisation de l'énoncé; mais plutôt de son principe de variation : il est tantôt plus divers que la structure de la phrase (et son identité est alors plus fine, plus fragile, plus facilement modifiable que celle d'un ensemble sémantique ou grammatical), tantôt plus constant que cette structure (et son identité est alors plus large, plus stable, moins accessible aux variations). » (*Ibid.* : p. 137.)
- 18) « Bien plus : non seulement cette identité de l'énoncé ne peut pas être une fois pour toutes située par rapport à celle de la phrase, mais elle est elle-même relative et oscille selon l'usage qu'on fait de l'énoncé et la manière dont on le manipule. » (*Ibid.*)
- 19) « La constance de l'énoncé, le maintien de son identité à travers les événements singuliers des énonciations, ses dédoublements à travers l'identité des formes, tout cela est fonction du *champ d'utilisation* dans lequel il se trouve investi. » (*Ibid.*)
- 20) « Pourtant la matérialité joue dans l'énoncé un rôle beaucoup plus important : elle n'est pas simplement principe de variation, modification des critères de reconnaissance, ou détermination de sous-ensembles linguistiques. Elle est constitutive de l'énoncé lui-même : il faut qu'un énoncé ait une substance, un support, un lieu et une date. » (*Ibid.* : p. 133.)
- 21) « Cette singularité pourtant laisse passer un certain nombre de constantes : grammaticales, sémantiques, logiques, par lesquelles on peut, en neutralisant le moment de l'énonciation et les coordonnées qui l'individualisent, reconnaître la forme générale d'une phrase, d'une signification, d'une proposition. » (*Ibid.* : p. 134.)
- 22) « Le temps et le lieu de l'énonciation, le support matériel qu'elle utilise deviennent alors indifférents au moins pour une grande part : et ce qui se détache, c'est une forme qui est indéfiniment répétable et qui peut donner lieu aux énonciations les plus dispersées. » (*Ibid.*)
- 23) « Mais ici ces « petites » différences ne sont pas efficaces pour altérer l'identité de l'énoncé et pour en faire surgir un autre : elles sont toutes neutralisées dans l'élément général — matériel, bien sûr, mais également institutionnel et économique — du « livre » : [...]. » (*Ibid.* : p. 135.)
- 24) « On voit sur ce premier exemple que la matérialité de l'énoncé n'est point définie par l'espace occupé ou la date de formulation; mais plutôt par un statut de chose ou d'objet. » (*Ibid.*)
- 25) « Statut qui n'est jamais définitif, mais modifiable, relatif et toujours susceptible d'être remis en question : [...]. » (*Ibid.*)
- 26) « Le régime de matérialité auquel obéissent nécessairement les énoncés est donc de l'ordre de l'institution plus que de la localisation spatio-temporelle; il définit des *possibilités de réinscription et de transcription* (mais aussi des seuils et des limites) plus que des individualités limitées et périssables. » (*Ibid.* : p. 136.)
- 27) *Confluences* 誌の目次などの基本情報については、以下を参照 : Cariguel, 2007 : pp. 156-173.

本論ではフランス国立図書館が所蔵する *Confluences* 誌を調査した。BnF での整理番号は次の通り : [à Haut-de-Jardin] S82/1570 [n° 1-6 (juillet-décembre, 1941)], S82/1571 [n° 7-15 (janvier-décembre, 1942)], S82/1572 [n° 16-20 (janvier-juin, 1943)], S82/1573 [n° 21-27 (juillet-décembre, 1943)], S82/1574 [n° 28-32 (janvier-décembre, 1944)], S84/3478 [n° 33-38 (juillet, 1944 - janvier, 1945)]; [à Rez-de-Jardin] 8-Z-8220, MFICHE 8-Z-8220; [à Arsenal] 8-J°-22662 (n° 1, 19, 20, 21-24, 29, 30は欠号); [à Richelieu] LJ W-1159. トルビアクに所蔵されている2つのマイクロフィッシュについて、MFICHE 8-Z-8220 1941/07(N1) → 1941/12(N6) では15頁と16頁の間に次のような頁が挿入されている : « Texte

détérioré — reliure défectueuse NF Z 43-120-11. ». それに対して、Haut-de-Jardin のマイクロフィッシュ (S82/1570) には同頁の存在を確認することができないことから、二つの整理番号の資料が用いた原版は異なっていると考えられる。

- 28) この調査は科学研究費補助金によって、平成22年度から平成26年度までの5年計画で行っている(基盤研究(C)『サルトルの初期批評文芸作品の生成コンテクストに関する研究』、課題番号: 22520305)。
- 29) ただし、印刷は従前どおりリヨンの印刷所のままである: « Imp. G. NEVEU & C^{ie}, Lyon - 31.3998 » (*Confluences*, n° 1, 1945 : p. 110)。編集部のパリ移転についても、同号で次のように告知されている: «
- AVIS
- A dater du présent numéro, la Rédaction de la Revue est transférée à Paris, provisoirement 130, boulevard Haussmann (8^e) (tél. Laborde 84-11). René Bertelé y assume les fonctions de Rédacteur en chef et reçoit les lundi et mercredi, de 17 à 19 heures.
- Les services commerciaux et administratifs, notamment le service des abonnements continuent à fonctionner à Lyon, 4, rue Chambovet (3^e) (tél. V. 72-17). »
- 30) Pascal Fouché, 1991 : p. 238 : « En ce début de l'année 1940, leurs maisons fonctionnent au ralenti à cause de la mobilisation d'une partie de leur personnel et de la censure exercée depuis le mois d'août par le commissariat général à l'Information. Depuis fin septembre les réimpressions sont également soumises au visa de la censure. »
- 31) Syndicat des Éditeurs, « Convention sur la censure des Livres » (Fouché, 1987a : pp. 353-356.)
- 32) « Le 28 septembre est signée une « convention de censure » qui permet aux éditeurs de publier sous leur propre responsabilité ; ils s'engagent à ne pas éditer d'ouvrages qui pourraient déplaire à l'administration allemande. Seuls les livres sur lesquels ils auraient des doutes seront soumis à la Propaganda-Abteilung. » (Fouché, 1991 : p. 239.)
- 33) Cf. « Liste Bernhard » (Fouché, 1987a : pp. 287-290.)
- 34) « Ouvrages retirés de la vente par les éditeurs ou interdits par les autorités allemandes » (*Ibid.* : pp. 291-303.)
- 35) *Bibliographie de la France* 誌は Cercle de la Librairie 社が発行する週刊の業界誌。Cf. Jolly, 1991 : pp. 67-68.
- 36) « Complément à la liste des ouvrages dont la vente est interdite (Liste OTTO) » (Fouché, 1987a : pp. 304-305.)
- 37) « Unerwünschte Französische Literatur / Ouvrages Littéraires Français non désirables » (*Ibid.* : pp. 306-319.)
- 38) « Unerwünschte Französische Literatur / Ouvrages Littéraires Français non désirables » (*Ibid.* : pp. 320-347.)
- 39) « Le Syndicat des éditeurs, inquiet de ces événements, rédige le 6 décembre une « Note sur l'édition française » destinée à la Présidence du Conseil. Rappelant l'engagement qu'ont pris les éditeurs de ne rien publier « qui puisse nuire au prestige et aux intérêts allemands », le Syndicat attire l'attention du gouvernement sur le fait que, cette convention ne concernant que les livres, les Allemands subordonnent les autorisations de parution des périodiques à des prises de participation dans les entreprises. » (Fouché, 1991 : p. 241.)
- 40) « Censuré le 20-6-1941 » (*Confluences*, n° 1, 1941 : p. 136); « Censuré le 8 août 1941 » (*Confluences*, n° 2, 1941 : p. 280.)
- 41) *Confluences*, n° 1, 1941 : p. 1 (強調筆者).
- « La radio a tué les tours d'ivoire. L'écrivain aujourd'hui doit être contemporain de son siècle, être dans le

siècle.

Nous avons connu la pureté sacro-sainte, cette culture de luxe qu'on ne pouvait approcher qu'après s'être plongé dans je ne sais quelle eau lustrale. Dans un temps dramatique, où des milliers d'êtres combattaient et souffraient, les poètes ne sortaient qu'au clair de lune et ne touchaient rien qu'avec des gants immaculés. Leur fragilité leur interdisait le contact avec cette bête monstrueuse, perpétuellement en travail, qu'est le monde des hommes. Elle exigeait des évasions, des paradis artificiels. Ceux-là nous ont conduit à rechercher le vrai dans l'absurde, la force dans l'artifice, l'éternel dans l'arbitraire. L'ironie leur tenait lieu d'amour. Leurs troubles intérieurs étaient leurs grandes batailles. Ils jouaient avec le monde, avec les leurs, avec eux-mêmes, et celui qui, par malheur, scrutait en conscience, ils l'accusaient de sortir des règles du jeu. L'art, pour lequel nous luttons, doit être engagé, il doit être charnel.

Non pas que l'art d'écrire soit une dépendance de la politique. Encore une manière d'éviter l'humain, d'abstraire le réel[!] Nous disons bien haut que nous nous tiendrons hors de toute politique [et nous repousserons la moindre allusion à des p[robl]èm[es] d]ont les éléments ne sont point entre nos mains; ce faisant, nous sommes convaincus d'être fidèles autant à la vie qu'à l'art, pour nous inséparables. Nous avons connu le mal de la politique : il fallait être de gauche pour savoir parler du peuple, de droite pour comprendre l'héroïsme. Partout des chasses gardées et des spécialités, des étiquettes et des systèmes, qui nous cachaient la profondeur. Pour sa publicité l'écrivain devait adhérer à un parti, rallier une « église »; il se faisait l'apôtre, lui qui n'y connaissait rien, d'une conception économique. Il ne doit plus y avoir d'écrivains de droite ni de gauche. Il ne doit pas y avoir non plus un art de commande : tous les régimes qui on voulu édifier une littérature n'ont pu jamais accoucher que de reportages ou de vers de mirliton.

Nous ne rejetons pas — tentative trop facile — l'héritage et les leçons de nos aînés. Nous comptons bien même, quand ils le désireront, leur ouvrir ces pages. Il y a un procès à faire à une époque, mais l'art des plus grands, nous ne pouvons pas l'oublier, a été une protestation contre la bassesse de cette époque. Si nous lançons un appel, ce n'est donc pas pour ouvrir la porte aux médiocres, aux ratés, aux bénisseurs. Ce n'est même point par revendication, car nous ne croyons pas au mirage d'une littérature refaite par « La Jeunesse », l'art est le fruit de quelques individus renouvelés. Nous sommes seulement des jeunes gens qui avons profondément ressenti le drame du monde — parfois jusque dans notre propre chair —, qui rejetons les facilités d'un art d'exception pour embrasser la vérité humaine. Nous savons aussi que l'univers est fait de mystérieuses parentés, que la beauté a mille visages, mais une seule source. *Pour en témoigner, nous reprenons aujourd'hui « Confluences », que la guerre avait interrompue.*

« Confluences » publiera des œuvres (littéraires, philosophiques, etc...), des chroniques (musique, peinture, théâtre, etc...), des essais. Nous ferons une très large part à l'analyse des livres nouveaux et des revues. Car nous ne voulons pas être un cénacle, mais demeurer ouverts à tout ce qui naît d'authentique. Dans ce but nous faisons appel à la collaboration de tous ceux qui se sentiront poussés vers nous : cette revue doit être une rencontre, un lieu de confluences.

Confluences. »

42) Evleth, 1999 : p. 156.

43) “Preface” (Evleth, 1999 : pp. vii–viii.)

44) *Confluences*, n° 1, 1941 : p. 1. 本稿における *Confluences* 誌の記述は、1941年に始まるこの最初の「新シリーズ」のみを対象とすることになっている。

45) « Directeur : Jacques Aubenque jusqu'au n° 3 (septembre 1941) puis René Tavernier à partir du n° 4 (octobre 1941) ; rédacteur en chef : René Bertelé de janvier 1945 à avril 1946. — Certaines livraisons portent aussi un titre particulier

D'après l'éditorial de juillet 1941, fait suite à une publication de même titre interrompue par la guerre »

(Notice n° : FRBNF32746893. 強調筆者)

- 46) 同誌の主張に従えば、映画の上映自体が少なかったため、ドイツ占領下の雑誌で映画のコラムを設けていた雑誌も少なかった。
- 47) Daniel Halévy, *Charles Péguy et les Cahiers de la quinzaine*, Paris, Payot et Cie, 1918. この著作は1941年に第22刷、1947年には第37刷を数えている。Cf. BnF : Notice : FRBNF41653248, FRBNF35488041.
- 48) Georges Lecomte, *La Raçon*, Avignon, E. Aubanel, 1941. (BnF : Notice n° : FRBNF32362091)
- 49) P. Desbrières, *Face à l'épreuve avec Pascal*, Lyon, Paris, Éditions IAC (Impr. artistique en couleurs), 1941. (BnF : Notice n° : FRBNF32020015)
- 50) Lucienne Escoube, *Emily Brontë et ses démons*, Paris, Clermont, Sorlot, 1941. (BnF : Notice n° : FRBNF32082454)
- 51) « Titre(s) : L'Arbalète. Cahiers de poésie rédigés par des soldats ["puis" Cahiers trimestriels ; Revue semestrielle ; Revue de littérature] [Texte imprimé] / Numérotation : mai 1940 – été 1948 (n° 1–13) / Publication : Lyon : [s.n.?] / Description matérielle : In-4 / BnF : Notice n° : FRBNF32700600 »
- 52) « Titre(s) : Les Cahiers du Sud [Texte imprimé] / dir. Jean Ballard / Numérotation : 11e année, tome 1, n° 72 (1925, oct.)-53e année, tome 62, n° 390/391 (1966, oct./déc.) / Publication : Marseille : Les Cahiers du Sud, 1925–1966 / BnF : Notice n° : FRBNF32735744 »
- 53) « Titre(s) : Le Divan [Texte imprimé] / directeur : Henri Martineau / Variante(s) historique(s) du titre : — Le Divan aux écrivains morts pour la France, 1915–1918 / Numérotation : 1re année, n° 1 (janvier/février 1909)-50e année, n° 307 (juillet/décembre 1958) / Publication : Coulonges-sur-l'Autize : [H. Martineau], 1909–1958 / BnF : Notice n° : FRBNF34425818 »
- 54) « Titre(s) : Fontaine [Texte imprimé] : cahiers bimestriels de culture et d'information poétique / dir. Max-Pol Fouchet / Numérotation : N° 1 (1938, nov.)-n° 63 (1947, nov.) / Publication : Alger : Fontaine, 1939–1947 / BnF : Notice n° : FRBNF32776331 »
- 55) « Titre(s) : Guilde du livre [Texte imprimé] : choix d'auteurs contemporains et classiques : bulletin mensuel / éd. A. Mermoud / Numérotation : 1re année, vol. 1 (1936)-42e année, vol. 979 (1977) / Publication : Lausanne : La Guilde du livre, 1936–1977 / BnF : Notice n° : FRBNF34466647 »
- 56) « Titre(s) : Marsyas [Texte imprimé] : revue mensuelle / dir. Sully-André Peyre / Numérotation : 1re année, n° 1 (1921, janv.)-22e année, n° 240 (1942, sept./oct.) ; 26e année, n° 241 (1946, janv.)-41e année, n° 383 (1962, mai) / Publication : Le Cailar : [s.n.] ; Aigues-Vives : [s.n.], 1921–1962 / BnF : Notice n° : FRBNF32811994 »
- 57) « Titre(s) : Messages ... [Texte imprimé] : cahiers bimestriels / Numérotation : 1re année, n° 1 (1938, janv./févr.)-n° 3 (1938, mai/juin) ; 1re année, t. 1, n° 1 (1939)-2e cahier (1939) ; 1942, cahier 1-[cahier 4] ; 1943 ; 1944, 1–1944, 2 ; 1946, 1/2 / Publication : Paris : Ed. des Presses du Hibou, 1938–1946 / Note(s) : Le sous-titre varie. — A partir de 1939, chaque cahier porte aussi un titre particulier et certains paraissent sous forme de monographies. — Pour déjouer à la censure allemande, le titre collectif "Messages" ne figure pas sur le [4e] cahier de 1942, "Exercice du silence", publié à Bruxelles par les soins de Georges Lambrichs. — Le cahier de 1943, "Domaine français", a donné lieu à des réimpressions. — Avec 3 cahiers hors-série : "L'Archangélique" de Georges Bataille, avril 1944 ; "Volonté d'impuissance" de Michel Fardoulis-Lagrange, juin 1944 ; "Chêne et chien" de Raymond Queneau, janvier 1946 / Variante(s) de l'adresse : Paris : J. Flory, 1939 ; Paris : Ed. Messages, 1942 ; Bruxelles : J. Annotiau, 1942 ; Genève : Ed. des Trois collines, 1943 ; Paris : P. Seghers, 1944 ; Paris : Ed. de Minuit, 1946 / BnF : Notice n° : FRBNF32815317 »
- 58) « Titre(s) : Poésie ... [Texte imprimé] : ancienne revue des poètes casqués / Numérotation : N° 1 (1940, oct./nov.)-8e année, n° 41 (1947, nov.) ; [N.s.], n° 1 (1984, janv./févr.)-N° 104 (2005, mars) / Publication : Les Angles : P. Seghers, 1940–2005 / BnF : Notice n° : FRBNF32840475 »

- 59) « Titre(s) : Suisse contemporaine [Texte imprimé] / Numérotation : 1941–1949 [I–IX, 5e–13e s.] / Publication : Lausanne : [s.n.?] / Notice n° : FRBNF32873732 »
- 60) « Titre(s) : Traits. Lettres et documents. Publication mensuelle [“puis” : Poésie. Documents. Lettres. Revue indépendante] [Texte imprimé] / Numérotation : oct. 1940 – juin 1945 [I–V, n° 5] / Publication : Lausanne : [s.n.?] / BnF : Notice n° : FRBNF32879546 »
- 61) 第3号からは「le Monde et les Hommes」というパートは「le mois」と名称が改められているが、内容の点からいえば書評欄であることに変わりはない。
- 62) « Titre(s) : Le Pays libre [Texte imprimé] : Organe du Parti français national communiste / Numérotation : août 1936 [I, n° 1] – 1938 [?]. 8 févr. 1941 [VI, n. s. n° 1] – [...]. 4 janv. 1942–13 août 1944 [VII–IX, 3e s. n° 1–130] / Publication : Paris : [s.n.] / Note(s) : Le sous-titre varie. — En 1938 polytypé et de format in-4° / Variante(s) de l'adresse : Lyon : [s.n.] ; Paris : [s.n.] / Autre(s) auteur(s) : Parti français national communiste / Indice(s) Dewey : 074.582 (22e éd.) / ISSN et titre clé : / ISSN 2133–8078 = Le Pays libre / BnF : Notice n° : FRBNF32834486 »
- 63) « Notre ami Marcel Broudier a déjà violemment fustigé les foutriquets qui s'obstinent à faire de la culture au lieu de retourner à la terre manier la bûche, tels les équipiers de *Confluences* (mot qui, d'après le Larousse, désigne une maladie de la peau caractérisée par de nombreuses pustules...) » (*Confluences*, n° 18, 1943 : en 3° de couverture.)
- 64) « Titre(s) : Vivre [Texte imprimé] : cahiers vivarois / directeur : Marcel Bacconnier / Mise(s) à jour du titre : Vivre : cahiers vivarois, cévenols et rhodaniens / Variante(s) historique(s) du titre : — Cahiers vivarois, cévenols et rhodaniens, n° 5 / Numérotation : 1re année, n° 1 (juil. 1939) – t. 2, n° 5 (oct. 1941) [?] / Publication : Bourg-Saint-Andéol : M. Bacconnier, 1939–1941 / Description matérielle : 5 n° ; in-8 / Autre(s) auteur(s) : Bacconnier, Marcel (19.- ... ; peintre et sc). Directeur de publication / ISSN et titre clé : ISSN 1958–6140 = Vivre (Bourg-Saint-Andéol) / Notice n° : FRBNF32890427 »
- 65) « *Confluences* ... On l'a surnommée la N. R. F. de zone libre. On dirait mieux : une jeune N. R. F. Ses débuts ne manquent pas d'une certaine analogie avec ceux de son aînée. » (*Ibid.*) もちろんこの場合に言及されている *N.R.F.* 誌は占領下でドイツと協力関係に入る前の *N.R.F.* 誌。
- 66) « Titre(s) : Aujourd'hui [Texte imprimé] / Numérotation : N° 1 (1940, 10 sept.)-n° 1250 (1944, 16 août) / Publication : Paris : [s.n.], 1940–1944 / Description matérielle : Gr. fol / Note(s) : Réd. H. Jeanson puis dir. Georges Suarez / Périodicité : Quotid / Indice(s) Dewey : 070.442 / ISSN et titre clé : / ISSN 1255–9776 = Aujourd'hui (Paris. 1940) / Notice n° : FRBNF32706758 »
- 67) « La revue *Confluences*, qui présente toujours un vif intérêt littéraire, publie, sous le titre « Problèmes du Roman » et sous la direction de Jean Prévost, un excellent cahier. / (*Aujourd'hui*, Paris) » (*Confluences*, n° 25, en 3° de couverture.)
- 68) 第1号では、各号が10フランに対して、年間定期購読の価格が、フランスとフランス植民地で90フラン、外国で115フランと記されている。この価格設定については、早くも第3号において6ヶ月定期購読が設定されている(フランスと植民地で50フラン、外国が60フラン)。さらに、第7号(1942年1月号)からは各号が12,50フランに値上げされた上で、定期購読料も値上げされている。第9号(1942年2月号)からは、表紙裏の頁にて紙の供給不足に言及されるようになり、第14号(1942年11月号)では各号の値段が15フランに値上げされているとともに、新たにスイスでの販売価格が掲載されるようになる(各号2スイス・フラン)。この販売価格の地域区分については、第29号(1944年2–3月号)からは、それまでの「France et Colonie」から「France et Empire」へと変更されたり、第14号からは「Abonnement d'honneur」という制度を導入し積極的な寄付(500フラン)を募った上で、その趣旨について第19号(1943年4–5月号)で「A NOS AMIS LECTEURS」というテキストを掲載している : « Vous suivez notre effort, et l'intérêt que vous voulez bien lui témoigner constitue

pour nous un encouragement précieux. Nous avons toujours particulièrement tenu à cette collaboration que nos lecteurs nous apportent sous la forme de suggestions, d'approbations ou de critiques, et aussi d'appui financier, puisqu'hélas (sic) notre Revue ne peut exister, avec l'indépendance qui est sa raison d'être, sans les moyens personnels qui lui permettent d'assurer cette liberté.

Or, l'impossibilité dans laquelle nous nous trouvons de diffuser notre Revue dans la France entière, aggravée de la perte de nos dépôts en Afrique du Nord, donne à notre Revue une existence difficile. Plus que jamais nous avons besoin de votre aide pour poursuivre notre tâche.

Vous savez quels lourds sacrifices financiers sont indispensables pour maintenir la qualité et l'indépendance de notre Revue. Nous pensons que notre souci constant d'améliorer celle-ci, et les progrès que nous nous sommes efforcés de réaliser dans sa présentation comme dans la composition de ses sommaires, nous méritent votre confiance.

Aussi nous demandons-vous, si vous êtes abonné, de nous trouver un ou plusieurs autres abonnés, et, si vous le pouvez, de souscrire un abonnement d'honneur (500 fr.).

Si vous recevez le service de notre Revue, nous vous prions de vous abonner.

Ce n'est que par un tel concours que *Confluences* pourra poursuivre sa tâche.

L'accueil que vous ferez à notre appel nous montrera si vous nous jugez dignes de mériter votre soutien. » (*Confluences*, n° 19, avril-mai, 1943 : au recto de la couverture.)

69) « C. C. P. JACQUES AUBENQUE — LYON : 1023.60 » (*Confluences*, n° 3 : en 4^e de couverture.); « C. C. P. René TAVERNIER, Lyon 1023-60 » (*Confluences*, n° 4 : en 4^e de couverture.)

70) « Correspondant en Zone Nord : / CLAUDE MORGAN, 2, Rue du Cèdre, Saint-Germain-en-Laye / (Seine-et-Oise) » (*Confluences*, n° 19, avril-mai, 1943 : en 4^e de couverture.)

71) « PIERRE LEYRIS, 44, Rue des Belles-Feuilles, Paris (16^e) » (*Confluences*, n° 28, janvier-février, 1944 : en 4^e de couverture.) ただし彼の住所は第30号 (1944年3-4月号) から変更される: « PIERRE LEYRIS, 3, rue du Canivet, Paris (6^e) » (*Confluences*, n° 30, mars-avril, 1944 : en 4^e de couverture.)

72) « Portugal, Roumanie, Turquie, Hongrie, Bulgarie : Département Etranger Hachette, Monistrol-sur-Loire (Haute-Loire). » (*Confluences*, n° 15, décembre 1942 : en 4^e de couverture.)

73) 同印刷所については、第2号では住所を含めて大きく記述されていることを確認することができる。(*Confluences*, n° 2, août 1941 : en 8^e page après la page 280.)

74) « Générale Lyonnaise. C. O. L. 314.415 » (*Confluences*, n° 21-24, juillet-août 1943 : p. 415.)

75) René Tavernier, « Victoire en chantant... » (*Confluences*, n° 34, août 1944 : p. 115-126.)

76) *Ibid.*

77) 第12号は1942年7月号として刊行され、第13号はその2ヶ月後1942年10月号として刊行されている。また第11号の巻末に差し挟まれた広告では、*Confluences* 誌に今後掲載予定のテキストとしてアラゴンの詩も挙げられている。また発行再開後の第13号で編集部は、次のような読者への謝罪文を掲載している: « *Par suite de circonstances indépendantes de notre volonté, nos numéros d'Août et de Septembre n'ont pu paraître. / Nous nous en excusons auprès de nos lecteurs.* » (*Confluences*, n° 13 : p. 123.)

ドイツ占領界における文芸誌のパノラマを描いたオリヴィエ・カリゲルもこの経緯について簡単に報告している。(Cariguel, 2007 : pp. 170-172.)

78) Louis Aragon, « Nymphée », *Confluences*, n° 12, juillet 1942.

79) 第34号の巻末で、次号となる第35号にはヴィシー政権下で検閲されて掲載されなかったテキストが含まれると明言している: « Le présent numéro et les numéros suivants de *Confluences* contiennent tous des textes censurés par Vichy. » (*Confluences*, n° 34, août, 1944 : en 3^e de couverture.)

80) René Tavernier, *Confluences*, n° 35, septembre-octobre, 1944 : pp. 7-8.

- 81) 目次で「Paul Wattelet」と確認できる。
- 82) シモーヌ・ド・ボーヴォワールも *La Force de l'âge* (1960) の中で文芸誌 *Comœdia* について次のような逸話を紹介している：「Un vieux journaliste qui lui [= à Sartre] inspirait de la sympathie, Delange, lui proposa de tenir la chronique littéraire dans l'hebdomadaire *Comœdia* qui allait naître sous sa direction; cette publication, exclusivement consacrée aux lettres et aux arts, échappait à tout contrôle allemand, affirmait-il. Sartre accepta. La traduction de *Moby Dick* venait de paraître et il eut envie de parler de ce livre extraordinaire; il lui consacra sa première critique. Elle fut aussi la dernière car, une fois le numéro sorti, Sartre réalisa que *Comœdia* était moins indépendant que ne l'avait dit, et sans doute espéré, Delange.」(Beauvoir, 1960 : pp. 497-498.)
- 83) René Tavernier, « Victoire en chantant... » (*Confluences*, n° 34, août 1944.)
- 84) « Pour créer *Confluences*, ils [= Marc Beigbeder et Marc Barbezat] utilisent un stratagème : ils réalisent une fausse couverture de la revue afin de faire croire aux services du ministère de l'Information que la revue paraissait avant l'Occupation. Certificat trompeur de ce renouveau, la mention « nouvelle série » est ainsi indiquée du no 1 au no6 sur chaque première page de couverture. » (Cariguel, 2007 : p. 170.) ただし、カリゲルは、われわれが前章において確認した創刊の辞の一節については言及していない。
- 85) « Les difficultés actuelles d'édition — pénurie de papier et de force motrice, diminution des moyens de transport — s'opposent à ce que *Confluences* paraisse avec toute la ponctualité qui serait désirable. » (*Confluences*, n° 3, septembre 1941 : en 3^e de couverture.)
- 86) « En conséquence, et dans votre intérêt, nous ne saurions trop vous conseiller de vous abonner. / (Ci-dessous, bulletin d'abonnement à découper suivant le pointillé.) » (*Confluences*, n° 5, novembre 1941 : en 3^e de couverture.)
- 87) « Les manuscrits non insérés ne sont pas rendus. » (*Confluences*, n° 1 : en 4^e de couverture.)
- 88) « « *Confluences* » n'est pas responsable des manuscrits qui lui sont adressés et qui ne sont retournés à leurs auteurs que contre envoi préalable des frais de poste en timbres. / Il n'est répondu qu'aux lettres accompagnées d'un timbre pour la réponse. » (*Confluences*, n° 7, janvier 1942 : p. 139.) この注意書きは場所を表紙裏の頁に移して、続く第8号からも繰り返され、最後に次の一文が付け加えられている以外に変更されていない：「Pour tout changement d'adresse, joindre 2 francs en timbres.」(*Confluences*, n° 8, février 1942 : en 2^e de couverture.)

Bibliographie

Confluences. Revue mensuelle, Lyon, n° 1-n° 37/38, 1941-1944.

Simone de Beauvoir, *la Force de l'âge*, Librairie Gallimard, Paris, 1960. (シモーヌ・ド・ボーヴォワール, 朝吹登水子・二宮フサ訳, 『女ざかり』(上・下), 紀伊國屋書店, 東京, 1963年)

Anna Boschetti, *Sartre et « les Temps Modernes »*, les Éditions de Minuit, 1985. (アンナ・ボスケッティ, 石崎晴巳訳, 『知識人の覇権：20世紀フランス文化界とサルトル』, 新評論, 東京, 1987年)

Pierre Bourdieu, *Choses dites*, coll. « Le sens commun », les Éditions de Minuit, Paris, 1987. (ピエール・ブルデュー, 石崎晴巳訳, 『構造と実践：ブルデュー自身によるブルデュー』, 新評論, 東京, 1988年)

Pierre Bourdieu, *La Distinction. Critique sociale du jugement*, coll. « Le sens commun », les Éditions de Minuit, Paris, 1979. (ピエール・ブルデュー, 石井洋二郎訳, 『ディスタンクシオン：社会的判断力批判』, 新評論, 東京, 1989年)

Olivier Cariguel, *Panorama des revues littéraires sous l'Occupation. Juillet 1940 - Août 1944*, coll. « Inventaires », Institut mémoires de l'édition contemporaine, 2007.

Donna Evleth (compiled by), *The Authorized Press in vichy and German Occupied France, 1940-1944. A*

- Biography*, Greenwood Press, Westport, Connecticut, 1999.
- Michel Foucault, *Les Mots et les Choses*, coll. « Bibliothèque des Sciences humaines », Éditions Gallimard, Paris, 1966. (ミシェル・フーコー, 渡辺一民・佐々木明訳, 『言葉と物: 人文科学の考古学』, 新潮社, 東京, 1974年)
- Michel Foucault, *L'Archéologie du Savoir*, coll. « Bibliothèque des Sciences humaines », Éditions Gallimard, Paris, 1969. (ミシェル・フーコー, 中村雄二郎訳, 『知の考古学』, 河出書房新社, 東京, 1981年 [2006年])
- Pascal Fouché, *L'Édition française sous l'Occupation. 1940–1944*, tome 3, Bibliothèque de Littérature française contemporaine de l'Université Paris 7, 1987a.
- Pascal Fouché, *L'Édition française sous l'Occupation. 1940–1944*, tome 4, Bibliothèque de Littérature française contemporaine de l'Université Paris 7, 1987b.
- Pascal Fouché, « l'édition littéraire, 1914–1950 », dans *Histoire de l'édition française. Le livre concurrenté 1900–1950*, sous la direction de Roger Chartier et Henri-Jean Martin, vol. 4, Fayard/Promodis, 1991.
- Wilbert O. Galitz, *The Essential Guide to User Interface Design: An Introduction to GUI Design principles and techniques*, Indianapolis, IN, John Wiley & Sons, 2007.
- Gérard Genette, *Introduction à l'architexte*, coll. « Poétique », Éditions du Seuil, 1979. (ジェラール・ジュネット, 和泉涼一訳, 『アルシテクスト序説』, 書肆風の薔薇, 東京, 1986年)
- Gérard Genette, *Palimpsestes. La littérature au second degré*, coll. « Points / Essais », Éditions du Seuil, 1982. (ジェラール・ジュネット, 和泉涼一訳, 『パランプセストー第二次の文学』, 水声社, 東京, 1995年)
- Gérard Genette, *Seuils*, coll. « Points / Essais », Éditions du Seuil, 1987. (ジェラール・ジュネット, 和泉涼一訳, 『スイユ: テクストから書物へ』, 水声社, 東京, 2001年)
- Claude Jolly, « ANNEXES : Le développement du Cercle de la librairie, syndicat des industries du livre », dans *Histoire de l'édition française. Le livre concurrenté 1900–1950*, sous la direction de Roger Chartier et Henri-Jean Martin, vol. 4, Fayard/Promodis, 1991.
- SHIGEMI Shinya, « La Littérature et les matières de ses supports — le paratexte du web — », 2011 (édition numérisée au site français *fabula* du colloque international *Enseigner la littérature à l'université aujourd'hui*, accessible à l'URL suivant : <http://www.fabula.org/colloques/document1537.php>).
- 重見晋也, 「エピテクストの通時的創造性(1)」, 『HERSETEC』 vol. 4, No. 2, 名古屋大学文学研究科, 2011, pp. 11–40.